開道百年と北海道美術

谷　口　一　芳

蝦夷地が今日の北海道にあらためられたのは，明治2年である。これより急速な開発がすすめられ，明年が百年目にあたる。

当時の人口は，わずか10万人といわれたものが，現在の500万人を超える生活の領域を確保するにいたつたことは，広い土地と豊富な資源によるものの，これをきり拓いた先人の偉業にほかならない。

このときにあたり，今日の北海道を正しく認識し，つぎの世代に一層の飛躍的発展を期するように努力するのがわれわれのつとめであろう。

すでに道民生活と産業開発の面から，本道の未来像がうちだされており，その基調は，将来の日本経済に主体的に寄与することに指向している。まことに喜ばしい限りである。しかし，文化政策についてのビジョンは低調であり，遺憾なことである。

このためには，北海道の美術がこの風土に育ち開花している事実を認識し，先輩に敬意を表するとともに，今後の発展振興に策を講じ，豊かな精神生活に寄与するよう大いに考えなければならぬことと思われる。

北海道美術の黎明期は，西洋においては後期印象派から野獣派の時代に移りつつあるときに当たり，かなり遅れていたが，その後めざましい発展を遂げ，今日では世界の潮流に伍するにいたっている。

開道百年は，この発展経過の地域的な流れを北海道の美術史として集大成する好機である。幸い関係者によって作業がすすめられているとのこと，すみやかに完成を期待するものである。

同時に，北海道美術館を建設すること。これは基盤整備の要であることは，すでにいいつくされており，この百年を契機につくらなければ，いつの日に姿をみることが可能であろう。道民に

いつまで幻の像を追わせておくことか―― いまこそ，念願の夢をかなえさせるものである。

すぐれた美術作品の収集保存，内外美術交流の場，創作発表の場を与える美術館は，風雪百年フロンティヤの地に造られてこそ，後世に輝くものであることを銘記すべきであろう。

道民生活の向上と相まって，美術振興の培養策も大事なことであり，いろいろ考えられるが，美術にたずさわる人口の増加をはかり，その底辺の層を厚くすること，そのため各地に研究，交流などにできる美術センターをつくり，その中から真の創造者の輩出を期待し，一般の関心を高めなければならないことであろう。

また，美術愛好者らをふやし，作品が流通することにより，作家が創作活動に打ち込めるような道を講ずることも肝要なことである。

一方，作家においては創作発表の場でみせられる，大多数を占める模倣的技術の氾濫をどうながめるか―大いに反省，自覚すべきことと思われる。諸外国では，それぞれの風土や個性が強調されていることを認識し，北海道の風土に立脚した作品を発表すべきと考えられる。

これらの実現には美術団体は主要なる指導的役割を演じなければならないであろう。

さらに，美術団体の考えるべきことの一つに，中央美術にいぞんする傾向の強いことがある。

風土に開花発展をもとめるならば，自立の道を考えなければならなく，単に太平な安定ムードの継承におくことを慎しみ，ときによっては前進の道をひらくためにも主義，主張ごとの団体に再編成することも必要でなかろうか。

開道百年を時点として，北海道の美術についていろいろな角度から考えることがあると思う。作家個人も，美術団体もよく現況を認識して，発展すべき未来像の描きかたを思索し，達成につとめるべきではないだろうかと思われる。